

注

① 本論文の題目に使用した英単語 oracle は、「神託(所)：(神託を告げる) 神管・哲人・賢人。」(学研 パーソナル英和・和英辞典「二〇〇〇」四七四頁)という名詞である。

題目提出当初、「神が、依り代となる特定の人物に降りる行為」と、「神託」、そして「神の依り代となる人物」の三つの意味を内含するものだと誤用してしまった。

正しくは、「神が、依り代となる特定の人物に降りる行為」をチベットの語で、「神」を指す lha に、「依る」の意である ten pa をともなう lha ten pa、それによつて導き出される「神託」は lung bstan、そして「神の依り代となる人物」は skurten とされる。

よつて論文中には、混乱を避けるため oracle を使用せず、「神が、依り代となる特定の人物に降りる行為」を「神にお伺いをたてる」、「神託」は「神託」、そして「神の依り代となる人物」を「クテン」と表記する。

② シベリアのシャーマン(Shaman)のトランス、古代ギリシアのデルフォイのアポロン神託、古代イスラエルのイザヤの預言、十九世紀後期にアメリカ・イギリス・イタリアで流行した交霊会、日本では口寄せなど。

③ 神や精霊と直接的に接触・交流し、その間に神意を伝え、予言をし、病氣治療を含む様々な儀礼を行なう呪術・宗教的職能者を中心とする宗教形態。

④ チベットには仏教伝播以前に存在していた伝承があった。これはミ・チュ(michos、「人の教え」と呼ばれる。ありとあらゆるものの起源を、隠喩、常套句、俚諺の使用した韻文形式で述べ伝えた格言の集まりである。これらを特定の祭司によつて吟詠される儀式が存在した(デイウィッド・スネルグロブ「一九九八」五十三頁)。

⑤ シガツェ(gZhi kha rtse)の管領ノルブ(Nor bu)。

『存在と時間』における死の可能性について

『存在と時間』における死の可能性について

北 河 智 美

目 次

はじめに

第一章 Hügli と Han によるハイデッガーへの批判

第一節 「私の死」および「私の存在」の問題化

第二節 死への先駆による現存在の個別化

第三節 Hügli と Han の議論のまとめ

第二章 個別化による他者関係の変容—Hügli と Han に対する反論(伊藤徹氏の議論を手掛かりとして)

第一節 日常性における「他者の不在」と死への先駆による現存在の「個別化」

第二節 死に面しての有意義連関の無効化と各私性の獲得

第三節 第一節と第二節の議論から Hügli と Han による批判の検証

第四節 覚悟性による共存在の変容

第五節 第四節の議論から Hügli と Han による批判の検証

第三章 「先立つて飛躍しつつ—自由にする顧慮(die vor-springende-befreiende Fürsorge)による積極的他者関係の構築の可能性

おわりに

ハイデッガーの死の分析に対してこれまで多くの批判がなされて

きたが、本論文においては「Heideggers Todesanalyse」における Anton Hügli と Byung-Chul Han による「ハイデッガーへの批判」について検証する。とりわけ「Heideggers Todesanalyse」の中で彼らの最終的な結論として述べた「愛は『存在と時間』のうちでは不在 (abwesend) である」(HT147) という言葉に注目する。彼らは、トルストイの『イワン・イリツチの死』の最後の言葉、死に面したイワン・イリツチが、他者に対する許しと愛に目覚めて述べた「もう死はないのだ」という言葉を引いて、死に面することは、死を克服し、むしろ他者への強い愛が生じてくるのである、と述べる。つまり、愛を向けるべき他者が存在していなければならないのに、「愛は『存在と時間』のうちでは不在である」、すなわち、「存在と時間」の内には愛を向けるべき他者が存在しない、と結論付けたのである。確かに、ハイデッガーは、死を可能性として定義する際、死とは最も自己的没交渉の可能性であると定義し、死によって現存在は個別化されると述べている点から考えれば、この見解は一見妥当しているように思われるかもしれない。けれども、『存在と時間』の内では本当に他者関係が希薄であるのだろうか。そこで、本論文では死へと先駆することにより引き起こされる個別化がどのようなものであるか、ということを検討することによって Hügli と Han が下した「愛は『存在と時間』の内では不在である」という結論の妥当性の検証を試みる。

第一章では「Heideggers Todesanalyse」における Hügli と

Han の見解がどのようなものであるかということを確認する。

死へと先駆することによって、現存在は「ひと (Das Man)」(SZ126) としての自己からどこまでも引き離され、誰のものでもなく代理不可能な「私の死」(SZ210) を自覚し、引き受けるようになる。「私の死」を自覚することは、同時に代理不可能な誰のものでもない、「私」の存在へと眼差しを向け、端的に自身の最も自己的な存在が重大問題であるところの存在可能を、自己自身から唯独りで引き受けることとなる。死は現存在を「現存在自身へと個別化」(SZ263) するもので、死に面しては、あらゆる関係が剥奪された自己だけが残され、「あらゆる他者たちとの共存在が機能しなくなる」(HT141) と Hügli と Han は考える。

しかし、現存在は「本質上共存在である」(SZ120) とハイデッガーが述べるように、現存在は常に共存在なので他者との関係は回復されなくてはならない。けれども、死に面して自己の有限性を自覚した現存在は他者に対する誤解や押し付けを改めるようになる、というハイデッガーの見解に対して、このような他者への態度の改善は自己自身にしか作用せず、自身の眼差しの変化が他者にそれを促すことはできないと Hügli と Han は述べる。したがって、死に面した現存在の個別化は、共存在を働かなくするものであり、孤立した現存在を要請するものである。ゆえに、Hügli と Han は『存在と時間』には他者の存在が希薄であると結論付けたのである。

第二章では、このような Hügli と Han による批判に対して、伊

藤徹氏の「他者の不在——ハイデッガーの場合」を手掛かりとしてハイデッガーの立場から反論を試みる。

まず、死は有意義連関を無効化する契機であるということを論じる。日常性において「私」が出会っていた他者とは、有意義連関の内で出会われる「ひと」としての他者であり、その他者の各私性を忘却しているような他者である。つまり、日常性における他者との関係は「他者の不在」(AA57)であり、そして「死(Tod)」はこのような関係を成立させている有意義連関を無効化するのである。死へと先駆して、個別化されることによって、「私」は「各私性」に目覚め、自己を強調し、自己自身を目差すことになる。自己自身の各私性を獲得したことによって、「私」が存在するのと「同様な仕方」で(SZ118)存在している他者の各私性に気づくことになるのである。他者の固有性に注目し、他者とは単に有意義連関の内の「ひと」としての他者ではないあり方をした他者として理解するようになる。つまり、自己を「ひと」という様態から取り戻すことによって、他者への眼差しを変える契機となるのである。

次に、この眼差しの変化は他者の「遠さ」(AA65)を目差すものであるということを論じる。死へと先駆して個別化された現存在は自己をことさらに掴むことになるが、自己を掴み取ることによって、むしろ他者への「遠さ」を知ることが出来るのである。つまり、覚悟した現存在が自己の「負い目存在(Schuldigsein)」(SZ285)を自覚することに基づいてのみ、他者への「負い目存在」、つまり「他

『存在と時間』における死の可能性について

者への通路の本質的欠損」(AA65)「すなわち他者への「遠さ」という他者関係の有限性を自覚することができるのである。以上のことから、伊藤氏の議論を参考にすることによって、現存在は個別化されることによって、他者の人格の不可侵性を自覚するという見解を導く。

第三章では、このような自覚が積極的他者関係の構築にどのように関係するのかということを明らかにすることになる。ここでは、他者の人格の不可侵性ということを具体的にハイデッガーの言葉で言い表すならば、「先立って飛躍しつつ自由にする顧慮(die vorspringende-befreiende Fürsorge)」(SZ122)ということになるということを論じる。自己を掴み取ることによって、日常的な「代理しつつ支配する顧慮(die einspringende-beherrschende Fürsorge)」(SZ122)において他者と関わるのではなく、他者の存在それ自身に関わることになる。他者への「負い目存在」を引き受け、他者関係の有限性と、「私」の「いかなる努力も及ばない他者」(AA67)の存在を自覚することが、他者に何かを押し付けたり、支配したりという強引な態度から身を引くようにするのである。HügliとHansが言うようにこの態度は他者には作用しない。しかし、この「作用しない」ということが「先立って飛躍しつつ自由にする顧慮」の本質なのである。「覚悟性(Entschlossenheit)」(SZ297)という本来的自己になることによる眼差しの変化は、そのことによって必ずしも本来的な共相互関係が成立するのではないが、本来的な共相互関

係の成立を可能にする条件なのである。このようにして「覚悟性という本来的な自己存在から、本来的な共相互関係が、初めて生じる」(SZ298) ことになるということが示される。

以上のことから、現存在をどこまでも個別化することによって、他者の人格の比類なさを自覚することから他者の人格を尊重するという態度が生じ、積極的な他者関係が構築されるということを明らかにし、冒頭の Hügli と Han による「愛は『存在と時間』のうちでは不在である」という見解が妥当しないという結論を導く。

註

ハイデッガーの著作からの引用については原則として次の略記号とページ数を引用文の後に付す。

SZ Sein und Zeit, Max Niemeyer, 1993.

また、それ以外の引用については次の略記号を用いる。

AA 伊藤徹、「他者の不在—ハイデッガーの場合」、(『思想』一九九〇年十二月号)。

HT Anton Hügli/Byung-Chul Han, 「Heideggers Todesanalyse」, (Martin Heidegger, Sein und Zeit, herausgegeben von Thomas Rentsch, Akademie Verlag, 2001).

カントにおける道德と宗教について

——根源悪をめぐる——

華 園 暁

目 次

序	
第一章 道德と宗教	
第一節 道德について	
第二節 道德の帰結	
第二章 善と悪	
第一節 善悪の概念	
第二節 善悪の選択	
第三節 道德的中間物	
第三章 素質と性向	
第一節 道德的自由	
第二節 善への根源的素質	
第三節 悪への性向	
第四節 心情の悪性	
第五節 根源悪	
第四章 悪の根拠	
第一節 生来悪	
第二節 悪の根拠	
第三節 格率の形式	